

2021年10月20日

BPO 放送倫理・番組向上機構
放送倫理検証委員会 御中

日本テレビ放送網株式会社

放送倫理検証委員会決定第41号に対する対応と取り組みについて

弊社は2021年3月12日の「スッキリ」にて、アイヌ民族に対する差別表現を放送したことに関し、2021年7月21日、貴委員会より「収録動画の最終チェック体制が極めて甘かったこと」、「アイヌ民族やその差別問題に関する基本的知識がスタッフ間で決定的に不足していた点」などの指摘を受け、民放連放送基準「(5)人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない」、「(10)人種・民族・国民に関することを取り扱う時は、その感情を尊重しなければならない」などに反しているとして、放送倫理違反があったとの判断を受けました。

弊社はこの決定を極めて重く受け止め、再発防止に取り組む所存です。以下、委員会決定を受けた弊社の対応と取り組みについてご報告いたします。

1、委員会決定についての放送

委員会決定を受け、弊社では以下の放送をいたしました。

・7月21日「news every.」

(放送した全文)

「日本テレビの情報番組「スッキリ」の中でアイヌ民族を傷つける不適切な差別表現があったことについてBPOの放送倫理検証委員会は先ほど、「放送倫理違反があった」とする意見書を公表しました。この問題はことし3月放送の「スッキリ」の中で、アイヌ民族の女性をテーマにしたドキュメンタリー作品を紹介した際、不適切な差別表現があったものです。BPOの放送倫理検証委員会はプロデューサーら10人からのヒアリングを含む調査の結果、「番組のスタッフの間にアイヌ民族やアイヌ差別に関する基本的知識が決定的に不足していた」「差別の意図、悪意がなかったとしても差別的な表現を用いた番組を放送した行為が容認されるわけではない」と指摘しました。その上で問題が起きたコーナーには専任の担当者がいないなど「隙だらけのチェック体制」であり「最終チェック体制が極めて甘かった」などとして、放送倫理違反があったという判断を下しました。日本テレビは「本日のBPOの意見を真摯に受け止め、今後の番組制作にいかし、再発防止に努めてまいります」としています。」

また、下記の番組でも委員会決定について放送いたしました。

- ・7月21日「news zero」
- ・7月22日「Oha!4 NEWS LIVE」
- ・7月22日「ZIP! NNN ニュース」
- ・7月22日「スッキリ」

これらのニュースの一部は日テレ NEWS24 で放送、配信もいたしました。

2、検証番組の放送について

「スッキリ」で差別表現を放送するに至った経緯や原因について、社内に検証チームを作って調査し、その結果を放送しました。

番組名 検証「スッキリ」アイヌ民族差別表現はなぜ放送されたのか

放送日時 8月28日(土) 26:30～27:00(関東ローカル)
8月29日(日) 26:05～26:35(北海道ローカル)
※同内容を8/26(木)「スッキリ」内でも放送(全国放送)

制作体制

検証チームリーダー 兼 検証番組演出	情報・制作局ディレクター
検証チーム 兼 検証番組監修	報道局特別解説委員
検証チーム	コンプライアンス推進室員
検証番組制作	「スッキリ」ディレクター

※社内調査ならびに検証番組の第三者性を担保するため、「スッキリ」の制作に関わっていなかったディレクターを検証チームのリーダーとし、報道局でコンプライアンスなどを担当する特別解説委員とコンプライアンス推進室員が加わり、関係者からの聞き取りなどによって経緯を調査しました。その結果及びアイヌ民族の歴史や差別の問題について、検証チームのリーダーとなったディレクターが構成、報道局の特別解説委員が監修して、「スッキリ」のディレクターと共に制作し、放送しました。

番組構成

- ・差別表現の放送に至った経緯を検証チームが調査した内容を報告するVTR
- ・調査で明らかになった問題点、BPOが指摘した問題点
- ・アイヌ民族の歴史や差別について当事者に話を聞いたVTR
- ・専門家の意見紹介、日本テレビの再発防止の取り組み報告

3、番組審議会への報告

9月28日に開かれた番組審議会で、コンプライアンス担当の取締役専務執行役員より、委員会決定の内容と弊社の対応について報告しました。また、この日の番組合評は、8月28日に放送された「検証『スッキリ』アイヌ民族差別表現はなぜ放送されたのか」を取り上げ討議しました。委員からは、下記のような意見が出されました。

- ・感度の低さ、つまり知識でも情報の伝達の仕方だけでなく、社会が関わってくる問題についての意識の低さが問題だった。
- ・アイヌ民族の差別問題を知らなかったという知識の不足は、社会全体に通ずる問題とを感じる。
- ・1994年の「イヨマンテの夜」問題から20数年が過ぎ再発してしまったことについて、風化させないためどう徹底したらいいのか、今回、新たに求められる。
- ・番組制作の過程がツルつとした危うい感じで、対話のあるコミュニケーション、意見を戦わせがいのある現場になってくれたら良い。
- ・徹底的な反省や検証があり、それを関係者が共有してこそ、更なる過ちに陥るのを防ぐことができると思う。
- ・問題が起きてから検証番組の放送まで、日本テレビの自主的、自律的なスピード感のある事後対応は、高く評価している。
- ・今回の件で磨いた感度を糧として、不条理や理不尽なことに対して敏感になり、番組で取り上げるなどの形で得点を上げていただきたい。
- ・番組を作るということは、番組を通して社会と関わり合っていくことだと思う。
- ・チェック体制の甘さをきっちり検証し、コンプライアンス室との関係や複数によるチェック体制など、萌芽されたものが検証番組の中で感じられ、今後生かしていただきたい。
- ・社内の徹底したヒアリングと、当事者の方や専門家など幅広い意見を取り入れ、わかりやすく、示唆に富んだ番組だった。

なお、この模様は10月10日、日本テレビ広報番組「日テレアップ Date！」において放送しました。また、放送後1週間、「TVer」と「日テレTADA！」にて配信しました。

4、BPO 委員を招き研修会を実施

10月1日、放送倫理検証委員会の高田昌幸委員長代行、米倉律委員、井桁大介委員を招きオンラインによる研修会を実施しました。情報・制作局の「スッキリ」制作担当者を中心に社内各部署より108名が出席しました。出席者には意見書、検証番組について事前にアンケートを実施し、3委員との意見交換の材料としました。研修会ではまず、今回の差別表現の放送について広く講評をいただきました。高田委員長代行からは、「この案件は直感的に過去の教訓(94年に日本テレビが放送したバラエティー番組で、アイヌ民族の尊厳を著しくおとしめ、差別を助長した事例)を30年近く前とはいえ生かし切れていない、これは再発案件だったのではないか」との指摘がありました。米倉委員からは、「テレビと社会の距離感の問題など、いろいろな問題が関わって起こった問題ではないか」。さらに井桁委員からは、「起こるべくして起きた。社会の感度レベルが少しずつ下がっていることは否めない。それでも、この件は線引きを超えていてアウトだった」との指摘がありました。

制作現場のプロデューサー等からは、意見書で指摘を受けた「感度の低下」について、「どうすれば感度を磨くことが出来るのか」との質問が多く寄せられました。これに対して高田委員長代行からは、「知識が無いところに感度は発生しない。知識があるということは、その自分の頭の中、あるいは皮膚感覚で、多くの物差しが自分の中で出来ている」「本を読むと知識が増える、知識が増えると自分の中の物差しが増える。そうすると、やはり感度が上がって来るんだろうと思う」との意見がありました。米倉委員からは、「放送倫理に関わるような高感度は、現場を歩く、現場の経験を踏んで行くことの中からしか、ある意味生まれられないもの、あるいは維持されないものと思う」。井桁委員からは、「差別は実は誰にでもある。いわゆる差別的な意識が、まず自分にあるということに気付くことが差別の勉強の一步。自分を見返す・見直す機会、その積み重ねが感度を高める事に繋がる」との意見をいただきました。

また研修会では、検証番組について3委員からの講評をいただき、制作・監修を担当した報道局特別解説委員との意見交換が行われました。

最後に、高田委員長代行から、担当者に聞き取りを行ったことを踏まえて、「ディレクターがコーナーを作って、それに対して、良いも悪いも基本的に返事が無い事がOKなのだと聞いて、『寒々した風景』が頭の中に出来てしまった」「やはり職場のコミュニケーションが上手くいっていかねばならない。後から気付くことかもしれないけれど、(本件は)上手くいってなかった。これはどの案件についても共通している出来事だと思う。是非、笑いがある職場にしていきたいと。働いて楽しいと思える職場にしていきたい」との意見をいただきました。

2時間にわたり委員と出席した制作現場担当者らとの間で、活発な意見交換が行われ、大変有意義なものとなりました。また、再発防止に関して多岐にわたる貴重な意見をいただきました。結びに、情報・制作局長は、「特効薬は無いが、個人・組織で出来ることを継続的に行い、知識を増やしていきたい」「マイノリティの立場に立てるかどうかが大事。そこをもう一度思い起こしたい」と研修会を総括しました。

5、再発防止に向けた取り組み

再発防止策について、以下の通り、取り組みを進めています。

1) 全社員・スタッフを対象にした研修の開催

5月26日に、北海道大学アイヌ・先住民研究センター 北原モコットウナシ准教授による、「アイヌ民族の文化・歴史に関する研修会」を行い、アイヌ民族に関しての理解を深めました。また、6月25日には、法務省人権擁護局 菊池浩局長による、「人権課題についての研修会」を行い、人権と差別について、あらためて考える機会となりました。今後も、アイヌ民族差別などの研修会を定期的で開催する予定です。

2) コンプライアンス推進室に「人権担当」を設置

人権問題についての理解や知識を深め、番組等からの相談に対し適切な助言を行う担当を新たに設けました。継続的な社内啓発を行い、社員・スタッフの意識を高めます。

3) 番組チェック体制の強化

当該番組「スッキリ」においては、コーナー担当以外の複数プロデューサーによるチェック体制を構築いたしました。また、生放送の情報番組において、事前に制作したVTRについては可能な限り、その番組制作担当者以外の視点でチェックする体制を構築いたしました。

4) アイヌ民族の歴史や文化を扱う番組の放送

「スッキリ」をはじめとした番組で、アイヌ民族の歴史、文化を伝える企画を放送してまいります。また、様々な差別・偏見等をめぐる問題についても、重要なテーマとして適切に伝えてまいります。

以下、既に放送した企画です。

- ・8月7日「ズームイン!!サタデー」にて、東京オリンピック公認プログラムとしてのアイヌ舞踊を生中継
- ・9月16日「スッキリ」にて、アイヌ民族の皆様の文化を伝える特集企画「世界に届け！アイヌ舞踊」

5) 番組審議会での討議

3月23日、番組審議会において、今回の放送の問題点や再発防止について討議し、その模様を4月4日、日本テレビ広報番組「日テレアップ Date！」において放送しました。

6) 検証番組の放送

8月26日および28日、今回の放送に至った原因を検証し、その結果について放送しました。

今後も番組制作を通じて、制作者の意識、知識を向上させ、再発防止に繋げるとともに、放送で失った信頼を取り戻し、人権問題の啓発に努めてまいります。

6、おわりに

意見書の最終章には、指摘された「感度」を磨く方策についての言及があります。

「差別根絶への第一歩は「知る」「知らせる」から始まる。そして放送人にとって「知る」ことの最大の契機は、番組を制作すること自体にあるはずだ。放送を続けることでしか、放送人としての感度は磨かれない。」

差別と向き合い、放送することが、感度を磨く唯一の方策である、とあります。本件は、差別に関する私たちの知識不足が大きな要因ですが、難しい課題だからと「知る」ことを臆せず、知って、伝えることで、感度を磨く。私たちはこのことを胸に、様々な人権課題に関する研修を継続的に実施し、差別の解消に繋がる放送を続けたいと考えています。

「再発防止」という観点に留まらず、多様性が認められる社会の実現に向け、放送事業者としての責務を果たしていく所存です。